

は、連作により土壌の強酸性や劣悪化をもたらす野菜等との輪作も困難にしており、収益性の高い野菜等のハウス栽培導入で経営の転換が図られている。なお、同一圃場の場合は永年性作目（アスパラガス等）への切替えが行われ、徐々に秋作の作付をひかえる傾向が見られるようになった。

県では、できるだけ土壌の悪化をおさえ、生産性を安定させるため、施肥基準の設定や、土壌病害の防止対策を打ち出している。これは、50年代初め連作障害の実態調査に基づき、対応策として策定された。今後とも、試験研究（調査）を充実し、継続実施することでその成果をおり込み万全の対策を講ずる必要がある。ちなみに現在、「連作障害克服新技術開発試験」を、病理、土壌肥料、栽培等の分野でプロジェクト研究を行い、57～61年まで実施中である。また、試験場、専技、普及の三者で、ばれいしょ連作障害確立のため、「新技術現地実証試験」に取り組み、59年より2か年間の計画で実施している。

4. 生産地における環境浄化と病害虫対策

主産地では、連作と作目の単一化により、栽培環境が悪く、特定の病害虫に汚染されてきている。

昭和29年頃から線虫類の被害が目立ち、EDB等によって防除対策が策定され、これに続いて、ジャガイモガの発見とその緊急対策

がとられるようになった。これまでばれいしょ重要病害である輪腐病の発見を契機として、原々種農場の設立があり、健全無病種もが供給され、採種体系が確立されて被害が少なくなった。しかし、青果栽培では、種いも更新が悪いと根強く病原菌が潜んでいるとみられており、現在まで、ほぼ10年を周期として発生し被害をもたらしている。また、土壌病害としてやっかいな、そうか病、青枯病等古くからばれいしょ栽培にはつきもので、連作により病菌の密度が増加し思わぬ時に大発生することが懸念されている。その他、疫病は、薬剤による防除効果が高いが、手を抜くと大発生を被り減収するばかりでなく、貯蔵中にいもが腐れる原因となっている。なお、疫病菌の菌系分化も進むものと予想され、一時「デジマ」がR₁を持ち抵抗性を示していたが、最近の流行期には必ず発病し、いもの腐敗等も多くなっていることでもうかがわれる。

収穫後の残渣の処分が悪いと、残りいもの雑草化が病害（ウイルス、輪腐病等）の汚染源となっている。また、病いもや病茎葉が圃場周辺や排水溝に捨てられているため病原菌の増殖の場となっているのが問題である。

このように、病害虫の発生しやすい環境条件を作りだしていることがうかがえるが、今後、このような環境の浄化を図ることが大切な点である。



甘しょ作とその収穫量及び甘しょでん粉生産量の推移と展望について (その1)

全国澱粉協同組合
連合会 専務理事

高 橋 伸

〈前号より続く〉 一方この産業構造の変化は、わが国独特の経済成長パターンの軌跡とのものであり、資本労働、技術、全ての面で農業が立ち遅れ、所得の平準化を目指して農村からの労働力の移動が行なわれ、この農業労働力の減少は、甘しょばかりでなく農耕地全体に影響を及ぼし、農耕地の中でも比較的労働集約的でなお農家収入でも相対的不利な普通畑の減少率が高く昭和40年代約8%強の減少であり、50年代に入っても減少を続け昭和54年の普通畑面積は昭和41年水準の約65%弱でありその後多少回復が見られるものの農村の都市化現象が続く中では悲観的な見方しか出来ないのが現状である。

農家労働力の減少はその労働力の高年令化と共に甘しょ生産における生産性の上昇が望めない要因でもあった。しかし甘しょの単位当たり収量は品種改良が寄与したこともあって、昭和47年以降天候不順による不作の年であった昭和51年を除き一応10アール当たり2t台を維持しているが伸び悩み停滞現象が見られることは主に肥料、農機具等に積極的な資本投入が出来ない甘しょ栽培農家の経済的基盤の弱小さにあるのではないだろうか。農水省農蚕園芸局畑作振興課の資料「畑作物別作付面積の推移」は別名「畑作に於ける甘しょの地位」として表現している。この資料を概観してみると、甘しょ作が主に野菜、果樹及び特に飼、肥料作物に作付転換されていることがうかがえるのである。

こうして思い出すことは、農産物に於ける「比較有利性の原理」である、即ち「ある地域が他の地域に比較して有利性の比率が最大となり、不利益性の比率が最小となる生産物に特化する」という比較生産費理論を基礎と

したもの考え方がある。農水省、農蚕園芸局、畑作振興課の部内資料の中から甘しょの全国生産量とでん粉原料向数量に対する、甘しょ主産県に於ける生産量及びでん粉原料向数量及び全国シェアの推移、即ち甘しょ生産の集約化、特化、状況を検証するために抽出作表したものである。

農水省農林水産技術会議が「九州防災営農調査研究報告書」に纏められているように「南九州の気象、農地、土壌といった農業生産の基盤は他の地域のそれに較べてきわめて脆弱である。それは主として風—台風、土壌などについていえる。まずこの地帯は我が国を襲う台風の70~80%が通過する。更にこの台風時と梅雨の所謂集中豪雨現象を呈し、雨期以外は極度に乾燥する。これは土地条件としての地勢及び土質の二つの側面に於ける特徴も表わしている。

さらに河川も宮崎では大淀川（流域面積2,230km²）五ヶ瀬川（1,820km²）その他比較的恵まれているが、鹿児島では川内川（1,610km²）以外小河川にすぎない。他方気候条件ではその温暖性故に亜熱帯作物など特用作物の導入も可能な条件も有している。

こういった条件がわが国最低の水田率として現われ、普通畑でも地下作物の栽培を有利としている。とりわけ澱粉原料用甘しょ栽培のためには気象条件の良さが澱粉含有率を高める効果を持ち、南九州の自然条件が甘しょ栽培に適していることが伺えるのである。

（4）甘しょ主産県に於ける今後の展望

甘しょ作の動向の中の甘しょ生産量の動向、普通畑面積に対する、甘しょ作面積の推移、甘しょ主産県に於ける甘しょ生産量を一瞥すると、昭和51年~52年を境にしてその後

鹿児島県、千葉県、茨城県は多少の増産傾向、宮崎県は横這い傾向を示している。この甘しょ作が今後どう展望されるかは、折しも米国を始めとしてEC、及びASEAN諸国と日本との貿易関係に於ける政策課題が今後どのように解決されるのか？ に大きく関係してくるところである。

然し乍ら農水省は、昭和59年4月「国内産いも、でん粉の生産の適正化について」その生産制限とも受け取れる、行政指導を行なっているのである。このことは勿論今後のいも作の指針として決定的な要素になっているのである。またこのことは国内のいも作及びいもでん粉について現在の諸外国との厳しい貿易摩擦の中で従来通り国内でん粉需給政策に

おけるTQ制度IQ制度並びに国内産いもでん粉との抱合せ販売制度を維持してゆくための行政々策として理解されるところであるが、こうした現行政策の中で甘しょ作が現状維持という姿を保つにはいも作農家のコスト増を伴わずその収益性を向上せしめるため甘しょの品種改良が積極的に行なわれる必要がある。このことは原料用甘しょの現在の収益性を単位面積と1日当り家族労働報酬の面で検討すると、生産制限という条件の中では、特にその感を強くするものである。鹿児島県における「主要作物の収益性及び生産費の動向を見ても同じことが言えるのではないだろうか。

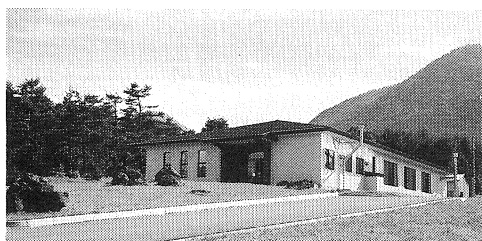
(以下・次号)

農場めぐり

孀恋馬鈴しょ原原種農場

孀恋馬鈴しょ原原種農場

次長 中西 進



孀恋村の馬鈴しょづくり

孀恋村は180年前から馬鈴しょ（ジャガタイモ）が作られるようになった。当時のいもは赤いもと白いもと俗称されていた。孀恋村では馬鈴しょと蕎麦が凶作を知らない作物として栽培され、食用と換金作物として重要な作物となっていた。

交通が不便なため加工して販売する工夫もされ文化年間澱粉の製法を発見し売り出したが品種、利益面により中断した後天保年間に水車又は人力による器具が考案され能率的な澱

粉生産が行われると共に販売も改善されて、“加多久利粉”として駄馬につまれ北国裏街道を高崎、江戸へと運ばれた。一番粉は澱粉として販売し、二番粉は蕎麦粉と混合して薄焼（せんべい）にして、冬期間は常食とした。澱粉粕は翌春、もう一度粉をとり、乾燥してこれを団子に作り、夏期のおやつにしたり、あるいは夕食等に重宝された。水田のない田代にとって作物の第一等と心得べき者也と明治29年本村松本氏が記した「いもの原由記」に詳しく記し、天保のききん、明治の不作にも馬鈴しょだけはよく稔って収穫でき、次のようにたたえている。「味噌になり、餅にも成るや、あつきにも芋ぞ田代のたのみなりける」と結んでいる。

当時の栽培法は、つぎのようであった（孀恋村大笹岩上家所蔵文書より）。